

《入選》

「水の都」を未来に残すために

大阪府 大阪府立水都国際中学校 1年

内海 うつみ はなえ

私の小学校最後の春休みを利用して、家族で沖縄旅行へ行きました。沖縄は、大阪に比べて海がとてもきれいです。特に、ホテルの近くのビーチは見たことのないほど美しく、魚と触れ合ったり、貝殻を拾ったり、一瞬で心を奪われました。

一方で、不安を感じる出来事もありました。美しいビーチにも、ペトボトルの破片やビニール袋などのごみが打ち上げられていたことと、台湾の地震の影響で沖縄県に津波警報が発令されたことです。海の自然の恵みを身近に感じられるというプラスの面は、私たち人間がそれを奪ってしまうかもしれないという不安や、大きな自然の驚異にさらされるというマイナスの面と、すぐ隣り合わせなのだと感じました。

この沖縄での経験をきっかけに、私が暮らしている大阪の水についても興味を持ち、調べてみることにしました。

大阪は、四百年ほど前の江戸時代から「水の都」と呼ばれ、府の面積のおよそ一割を河川が占めています。川や水路が多いおかげで、大阪には日本各地から品物が届き、都市として発展していきました。私の自宅のすぐ近くにも東横堀川が流れていて、タグボートが通過する様子を見ることがができます。また、社会実験プロジェクト「東横堀川ING」が季節ごとに開催されていて、父と妹は昨年のリバークルーズに参加しました。

しかし、大阪ではどの川へ行っても少し臭いが気になり、ゴミが浮いていたり水がにごっていたりするなど、「きれいだ」と感じたことは残念ながらありません。実際に二〇〇八年まで「日本一汚い川」と呼ばれていたという大和川では、小学校のプールおよそ二杯分の生活ごみが回収されたこともあったそうです。

どうすれば、大阪の川や海が、沖縄の海と同じように「きれいだ」「美しい」と感じられる姿に変わることができるのか。「水の都」の未来につ

いて、中学生の私が今取り組めることは何かを考えました。

昨年、私は大阪公立大学で行われた「アップサイクル ワークショップ」に参加しました。海洋プラスチックごみとして回収されたペットボトルキャップで、ハンドメイドアクセサリーを作る企画の中で大学生や水都国際高等学校の先輩からマイクロプラスチックの問題や海洋生物への影響について、スライドを交えながら解説してもらいました。

私も身近なところでは、ごみのポイ捨ては絶対にしないこと、レジ袋を利用せずエコバッグを持参することを家族と一緒に徹底しています。

また、最近SDGsへの関心が一層高まり、河川や海の清掃や川岸の植林活動など、自然の水質や環境を守る活動が増えているそうです。ワークショップでサポートしてくれた高校生達は「スポGOMI甲子園・大阪府大会」に参加・優勝したことを知り、少し年上の先輩が問題意識を持ち、学校の外で活躍をしていることにとっても驚きました。

地球温暖化や海洋プラスチック問題などの環境問題や社会問題に興味を持っている私が、生まれ育った大阪「水の都」と同じ名前のついた水都国際中学校に入学できたことは、大きなチャンスだととらえています。水都アクションプロジェクトやGAPSの活動を通して、少しでも美しい「水の都」を未来に残すため、学校や地域の中で仲間と共に自分ができることを探し、積極的に取り組んでいくことを、私の中学校生活の目標のひとつにします。